

滅びゆく部族の社会

パラワン島南部山地民ケン・エイ族について

大 島 襄 二

この論説は関西学院大学第1次パラワン島学術探検隊（筆者を長として学生5名、通訳1名）が1967年4月1日から5月28日までの2カ月間行なった探検調査に基くもので、特に4月24日から5月10日までの17日間定着したケン・エイ族のタオト・ダラム部落における調査を中心に分析したものである。なお総括的な報告書は『パラワン島の原住民と自然』として1968年3月に刊行したので重複を避けつつ問題点の一部を指摘したい。

1 パラワン島の人類学的位置

フィリピン共和国の西南端に横たわるパラワン (Palawan) 島は、インドネシア諸島からフィリピン群島への懸け橋の役目を果たす細長い島である。東経117°から120°、北緯8°から11°にかけて、南西から北東へ経緯線と対角線状に位置し、南シナ海とスールー (Sulu) 海とを分けている。面積11,791 km²、長さ457km、巾は広い所で40km、狭い所で5kmであるが、中央は1,500~2,000mの褶曲山脈が走り、屏風のようにそそり立っているので横断は困難であり、この山脈が兩岸の気候を明瞭に区分している。

このパラワン島は人類学的に極めて特異な島である。人類の流れの一つがアジア大陸部分からインドネシアの島嶼伝いに東に進んだと考えられるが、フィ

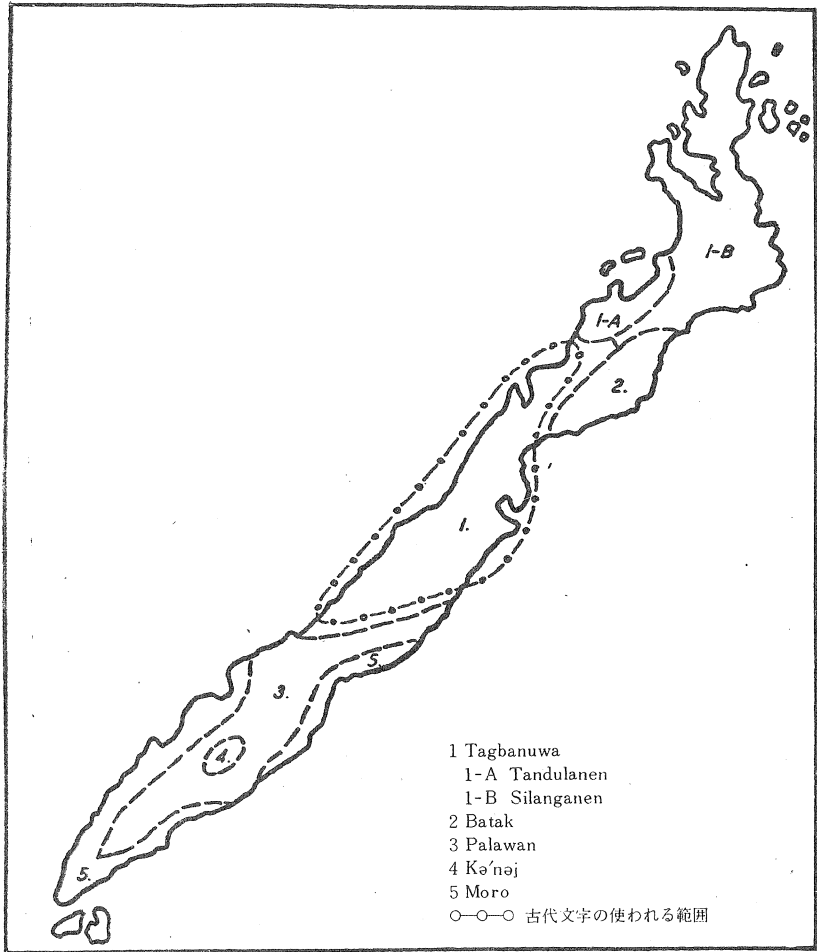
リピン共和国に現存する人種のうちかなりの部分が、ボルネオ → パラワン → ミンドロ (Mindoro) → ルソン (Luzon) という経路を辿ったのではないかと考えられる。パラワン島自体の人種構成のうち現在までにはほぼ定説化されているものは、

1. まず旧石器時代にネグリート (Negrito) 系の原始民族が渡来した。これが東岸北部に残っているバタック (Batak, または Batac) 族である。このようなネグリート系の黒色矮小民族はルソン島北部その他にも残存して特異な狩猟生活を保っている。
2. 次に新石器時代初期までに原マレー (Proto-Malay) 系の民族が渡来した。タグバヌア (Tagbanua, または Tagbanuwa) 族がこれで、このタグバヌア族およびその混血種はパラワン島の人種構成のうち基盤をなしていると考えられる。
3. 14世紀頃からイスラム教を奉ずる民族、いわゆるモロ (Moro) 族が反覆して来住し、一時はセブ (Cebu) 島からマニラ周辺まで占拠した。パラワン島のモロ族はボルネオの土侯の支配下にあつて、当時フィリピンを統治していたスペインに激しく抵抗し、勇猛兇暴の海洋民族として恐れられていた。

以上の三つの流れが南西から北東へこの島を洗って行ったのに対し、

4. 最後にタガログ (Tagalog) 系のビサヤ (Visaya, または Bisaya) 移民の群が北東部から入って来た。これは時代的にも新しいし、或る意味では嘗てどの経路かによってインドネシア側からフィリピン主要部に入ったマレー系部族の逆流でもある。例えば水田耕作等をもたらしてパラワン島の海岸部、特に東海岸中部の文化を一挙に向上させたのはこの流れによる。

これらの定説を多少修正しつつ整理した形のものの一つが1949年に H. C. Conkilyn 博士によって発表されたパラワン島人種地図(第1図)である(註1)。こ



第1図 パラワン人種地図—I

H. C. Conklin 原図

れによるとそれぞれの分布は

1. タグバヌア族——島の中央部以北。なお古いインド系の文字が残っている。

1—A タンドゥラネン(Tangdulanen)族——北部西岸

1—B シランガネン(Silanganen)族——北部一帯

2. バタック族——中部東岸

3. パラワン(Palawanes)族——南部内陸

4. ケン・エイ(Ken-ey)族——南部山地

5. モロ族——南部海岸地方

となっている。すなわち、タグバヌア族の支族二つが弁別されており、また従来は「モロ族のうちパラワン島に住むものをパラワン族と称する」とされていた(註2)ものを、Conklin は明瞭に区別して、パラワン族とモロ族の居住地域を示している。これは、われわれの所見でも外見的に明らかに別箇のものであり、パラワン族は体質的にはむしろタグバヌア族に近いのではないかとさえ思われる(註3)。またケン・エイ族を図中に指示しているが、これはこの部族に関して公式に発表された唯一の資料である。しかしこの論文の本文中にケン・エイ族の説明はない。

C. N. I. (Commission on National Integration, 国立少数部族統一委員会) は従来の調査資料の上に、今回のわれわれの調査結果を加えて人種地図を修正作成し、筆者の手許に送付して来た(第2図)(註4)。大局的には Conklin のものと大差はないともいえるが、

1. パラワン族

2. タグバヌア族

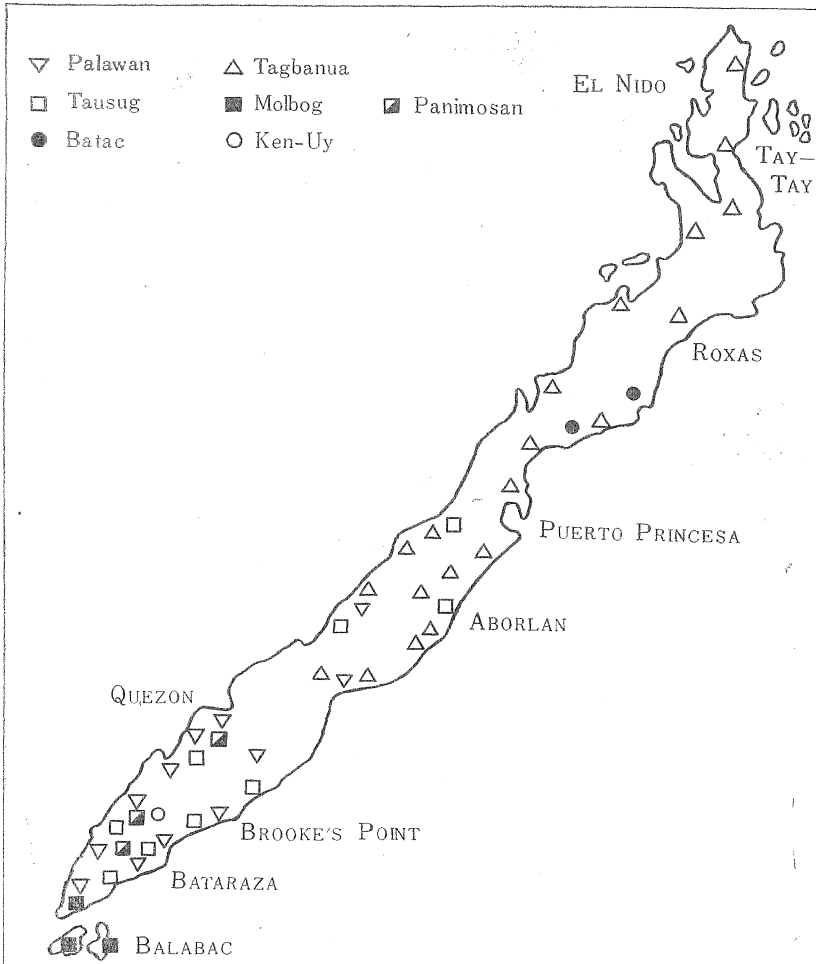
3. タウスグ(Tausug)族

4. モルボッグ(Molbog)族

5. パニモサン(Panimosan)族

6. バタック族

7. ケン・エイ族



第2図 パラワン人種地図一Ⅱ

B. C. Orlido 原図

と並べていて、タグバナア族を細分せず、パラワン族と共に第1グループとし、モロ族に当たるものをタウスグ、モルボグ、パニモサンの3部族に分けてこれを第2グループ、そしてバタック族とケン・エイ族とはそれらのグループに

属さない特異なものとしている。モロ族の名称が使われていない理由はイスラム教徒として一般名詞化したものであって厳密な意味の部族名と認めていないからである。島の南端からバラバック (Balabac) 諸島にかけて住むものをモルボッグ、西岸に多いものをパニモサン、全般的な分布をするものをタウスグという分け方をしている。なお1952年にパラワン南部を踏査した T. U. Ellinger 博士はパラワン南部の記録の中に、モロとタオ・スグ (Tao-sug) という語とを使い分けている(註5, 6)。

ここで一応、ケン・エイ族の位置づけを試みよう。パラワン島の原住民のうちバタック族がいちばん古い民族であること、モロ族がいちばん新しい民族(ピサヤ移民以後は除く)であることには異論はない。そうするとタグバヌア、パラワン、ケン・エイの前後関係が問題になるが、島の中部以北まで入ったタグバヌア族と南部で留まったパラワン、ケン・エイ両族とでは多少問題を異にする。そして少くとも南部ではケン・エイ——パラワン——モロという順で来

第1表 各部族の身体的特徴

	身長	頭型	鼻型
Batak 族	150 cm	81	97
Tagbanua 族	155 cm	81	93
Moro 族	160 cm	83	83
Ken-ey 族*	152 cm	—	—

(クローバー「フィリピン民族誌」より、ただし*印はわれわれの調査による)

危険であるが、ケン・エイ族の或る者はパラワン族と区別し難いほどよく似ており、特に生活風習に關しての文化の混在は著しい。

われわれの撮影して来たケン・エイ族の写真によって、フィリピン大学人類学教室 M. C. Bello 教授は、「全体としてモンゴロイド (Mongoloid) 系の特徴が卓越し、特に蒙古眼裂は女子に著しいが、男子の一部はインドネソイド

住して、あとの者が先の者を内陸から山奥へ追いやつたこと、同時にそれら相互間にかなりの混血を伴ったことは想像に難くない。人類学的な計測をしていないままで結論を急ぐことは

(Indonesoid) 系の要素, いわゆる プロト・マレー (Proto-Malay) 型の者も居る。周囲のパラワン族はじめ海岸部族との混血もあるのではないかと」言っている。

生活風習に関しては、同教授は「衣服はインドネシア風のバティック (batik), 銅鑼はモスレム風, 住居様式はミンダナオに見られるものに類似し, 特に木の葉や竹を編んで作った壁はバゴボ (Bagabo) 族, マノボ (Manobo) 族のものと共通であり, 屋根型はルソン島の諸族にさえ見られる」と説明している。また民俗芸術品がイフガオ (Ifgao) 族と共通していることは R. B. Fox 博士 (シカゴ大学教授, のちフィリピン国立博物館, 人類学・考古学主任) が指摘している。ケン・エイ族の特色の一つと見られる樹上家屋は, 13世紀頃の中国の記録にフィリピン原住民の一般的な異風として紹介されたというが, 現在でもルソン北部のガダング (Gaddang) 族とカリング (Kalinga) 族, ミンダナオ東部のマンドヤ (Mandaya) 族とマノボ族にも見られる(註7)。ケン・エイ族に限っていうならば, 猛獣などのいないパラワン山地であるように高い樹上家屋を構えねばならないという理由が見出せないだけに, 他民族の模倣か, 或いはこの民族自体がパラワンに住みつく前から持っていた遺習といったものではないかと思われる。また死者を樹の皮に巻いて葬るという風習がケン・エイ族にあると聞くが(註8), 全く同様な風習をルソン北部のピナツボ (Pinatubo) 族に関する R. B. Fox 博士の報告に見ることができる(註9)。

パラワン島内に絞って考えて見ても, 前記の銅鑼 (agong) はバタック族に, ピナドゥンガン (pinadungan) と称する焼畑耕地の祭壇はパラワン族に, 全く同様なものが見られ, 舟型の臼はタグバヌア族, パラワン族, ケン・エイ族で少しずつ形が違うが, ボルネオあたりとも共通した基本型に発するもので, むしろその形体の比較に文化の連続性が窺われる(第3図)。デンマーク人の生物学者であり, フィリピン大学教授だった Ellinger がパラワン族の民具として

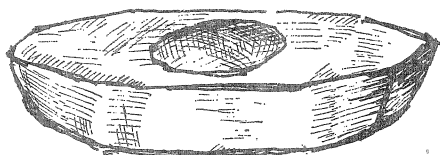
タグバヌア族



パラワン族



ケン・エイ族



第3図 各部族の臼

フィリピン大学博物館に持帰ったものの大部分は、今回そのままケン・エイ族の生活の中で発見された。

3 ケン・エイ族の生活空間

ケン・エイ族がどこに居るかということは従来ほとんど知られていなかった。フィリピン政府では、その数も把握できておらず、100人前後がパラワン島南部山地に居住しているだろうと推測しているに過ぎなかった。

われわれが今回の調査の資料としたデータは、

1. R. B. Fox 博士は1964年以来パラワン島ケソン (Quezon) にフィリピン国立博物館分室を設けて民族調査に当たっている学者であるが、1963年に

飛行機でマンタリンガハン (Mantalingajan) 山(2084m)周辺を偵察した上で、ランサン(Ransang)川源流付近にケン・エイ部落を発見し改めてランサンから陸路進入して、ケラン・ブキッド (Kelang Bukid) 南方のバラバグ(Balabag) 断崖付近でケン・エイ族を見ている(註10)。

2. C. N. I. の M. Manampan 氏とブルークス・ポイント (Brooke's Point) の森林官 G. Manocdoc 氏が、ブルークス・ポイント在住のバラワン族に嫁いだケン・エイ族出身の女性を通して、その出身地ウマヤ (Umaya) 地区のケン・エイ族のことを報告している(註11)。

3. C. N. I. の P. M. Yap 女史と E. Dator 氏は各地の情報を整理した上でガンツング(Gantung)山(1787m)の南斜面上、エラアン(Eraan)川源流付近のナラランガ(Nararanga)地方にケン・エイ族の居住することを推定しているが、両名とも現地を確認してはいない。

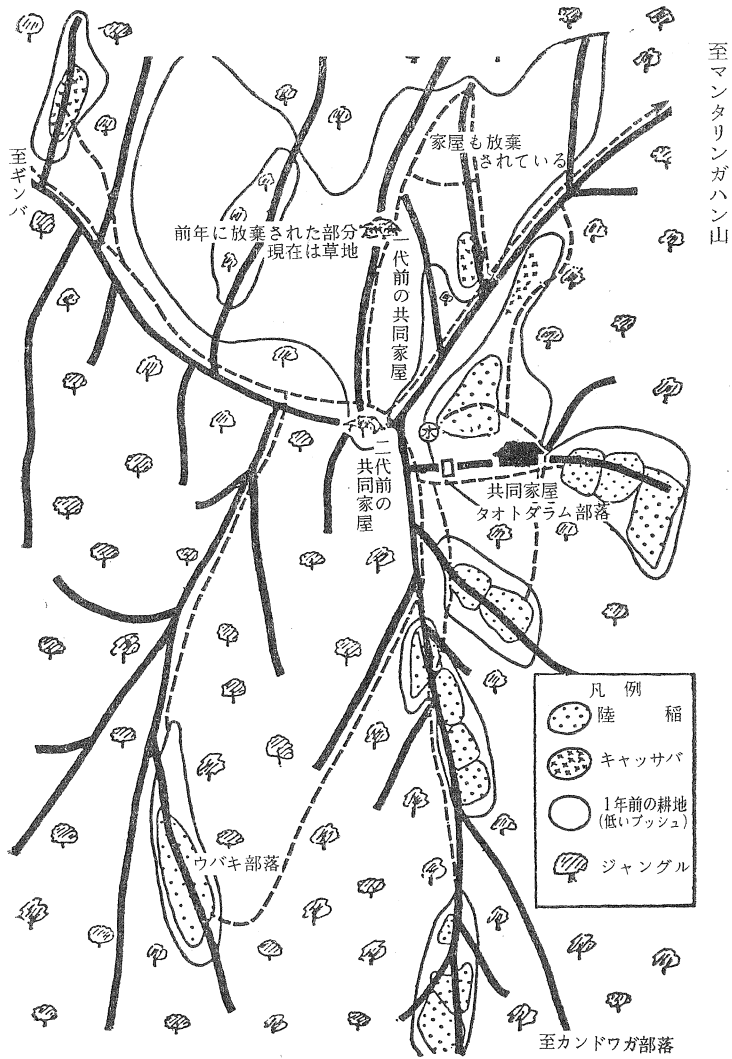
以上のデータを基にしてわれわれ自身はランサン川を遡り、その上流部で分水嶺を一つ越えて、カンドワガ(Canduaga)川上流、海拔700mの地点の、タオト・ダラム(Taot-Daram)部落で46人のケン・エイ族を確認した。なお、この中には飛地ウバキ(Ubaki)への季節的移動の人口を含んでいるが、通婚圏の認められるカンドワガ川の対岸、カンドワガ(Canduaga)部落の方は人口を確認しておらず、そこにも50人足らずのケン・エイ族が散居していると考えられる。

1～3のすべてのデータが正しいものと仮定して総合してみると、ガンツング山地からマンタリンガハン山地まで、エラアン川、イログ(Ilog)川、ランサン川、カンドワガ川(以上西流して南シナ海へ注ぐ)、マラシガス(Marangas)川(東流してスルー海へ注ぐ)の源流部分に及ぶ直線距離25～30 kmの間に semi-nomadic の生活をしながら、三つまたは四つのグループ、合計150または200人のケン・エイ族が居住することになる。もっとも Fox の報告したケラ

ン・ブキッド付近には、われわれの調査時にはケン・エイ族はいなかったし、ウマヤ、ナラランガ両地区の報告はいずれも現地調査を伴ったものではない。

タオト・ダラム部落の中心部は東経 $117^{\circ}38'$ 、北緯 $8^{\circ}48'$ 、標高 640 m の位置にあり、部落の東部を南流(やがて直角に西に方向を転ずる)するカンドワガ川の谷を隔てて、パラワン島最高峰マンタリンガハン山に面する。川岸付近から部落上限までの標高差 200 m、 $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の傾斜をもつ東向きの斜面を中心に半径約 2 km の範囲内に焼畑が分布している。その大部分はかなり連続的に分布しており、当年の焼畑(陸稻、キャッサバ、タロイモ、サトウキビ、トウモロコシを混植するが原則として1年放棄らしい)と、前年または2年前くらいに耕作していまは既にわれわれの身長を上廻る程の叢林と化した部分(そこからも、キャッサバ、サトウキビは収穫される)とが混在している(第4図)。家屋は、ケン・エイ族独自と考えられる共同樹上家屋(Dakula-Banua、約 12 m 四方、地上 11 m、14家族の居室あり)を中心に、各焼畑ごとには焼畑小屋ともいふべき個人用の樹上家屋または高床家屋(高さ 2~10m)が散在するが、廃屋の状況から判断して家屋の耐用年数は2年には及ばないと考えられる。骨組だけになった廃屋と二次叢林の状況から、集落と農地の移動のあとを追究してみたかったのだが、それぞれ3年より以前には遡り得ないので、早急な結論は出し難い。しかし Fox の発見したケラン・ブキッド部落(タオト・ダラム部落の北方 5~6 km)が跡かたもなく荒廃している状態や、タオト・ダラム自体は20年程前にケン・エイ族の部落があって、のちそれがいったん無人であつたらしいということ(註12)等から、或いは3~5年で1地域を放棄しながら20年位で回帰するという移動を繰返しているのかも知れない。

なお現部落の農地・家屋の外側に部落民によるイノシシ罾(現地語 baratick)や小鳥罾(現地語 sholo)が存在して、もちろん部落民はそこへ獲物を見に行くし、さらに個人所有の確認されているアルマシガ(almaciga—樹脂が塗料原



第4図 タオト・ダラム概念図

料・接着剤・灯火用燃料となるもので、他部族との交易に用いられる)の樹の分布はかなり広い範囲に及んでいる。これらケン・エイ族の生活痕跡ともいえるべきものを含めると、タオト・ダラムの周辺半径約5km、高距限界はマンタリンガハン山斜面1,300m付近にまで及んでいる。

なおケン・エイ族は洞窟居住者であると考えられていた。現実にはわれわれの調査で確認したように、共同家屋を中心とした樹上家屋が彼等の住居であるのだが、例えばFoxが現認したとおり、たしかに洞窟を根拠地とする漂泊の生活も営むものらしい。そのような洞窟の一部をわれわれはピナガル (Pinagar) という地点で見だし、Foxはバラバグ断崖の中に発見している。マンタリンガハン山系が石灰岩質の地帯であるのでタオト・ダラム付近にもそのようなものの存在は予測される。ケン・エイ族がコウモリを食用とするという噂は、彼等の捕獲して食糧とした動物の下顎骨(それを飾りか呪術の意味で保存しているのであるが)の中にヒゲイノシシ、ヤマネコ、リスの骨に混ってオオコウモリのものがあったことで証明されるのであるが、このコウモリは前述のような洞窟地帯でオコット(okot)という捕獲具(竿の先に刺のある植物をつけた3~4mのもので、コウモリの翅を引っかける)で捕えるものである。そうしてみると、たとえ或る時期の農地・集落がどこになっていようと、限定された猟場(?)としての洞窟や前述のアルマンガの樹の存在するところへは必ず往復していることになる。すなわち移動する農地・住居と、固定した猟場・特定樹木との組み合わせによって、ケン・エイ族の生活空間が構成されていると見てよい。同様に、ランサン川上流やカンドワガ川上流の1~3月の漁場もケン・エイ族の生活空間を規定していることになるだろう。

ところでタオト・ダラムの部落民の生活は一方ではカンドワガ部落のケン・エイ族とかなり密接な結合があり、他方では異民族であるパラワン族の首長と経済的・政治的関連が強い。

カンドワガとの間には通婚その他により血縁関係が濃いことが推測される。タオト・ダラムで調べた46人のうち、カンドガワ出身であることの確認される3人のほかに家系の明らかでない7人も大部分(或いは全部)がそこから来ているものと考えられる。そのようなものの数人はわれわれの調査期間中にカンドワガへ行くと言って出かけたし、カンドワガ部落でタオト・ダラムの住人と出会った例もある。しかしこのような往復が何を目的としたものかは明らかでない。両部落間で農地の混在はないようだから、或いはアルマンガ樹脂の採取や罌の見廻りかも知れない。次に述べる交易関係では、カンドワガ部落民がタオト・ダラムを通過してランサン側のパラワン族首長のところへ行ったことはない。

経済的・政治的支配者はパラワン族の Ambilan という首長である。彼はわれわれの調査した時はギンバ(Gimba)というランサン川中流の部落に居たが、広汎な領域内にいくつかの居宅を持っており、ギンバよりやや下流のピナプンティハン(Pinapuntijan)と海岸のランサンでも彼の豪荘な居宅を見だし、Ellinger の記事によるとタンキアウ(Tankiau)とバグナウ(Bagnau)という地点で Ambilan の居宅を訪れているという。

ケン・エイ族の中には部落長とか長老という制度が存在せず、タオト・ダラムの部落民は直接 Ambilan の支配下にあった。調査当時の彼の住所ギンバへは、タオト・ダラムから徒歩8～10時間行程くらいであるが、だいたい1泊の日程で部落民は始終往復していた。主な目的は交易であって、アルマンガの樹脂を集めてギンバへ運び、そこでこれを帳簿につけて買受けてもらい、その代り何か必要な生活物資を得て来る。モロ族の行商人によって海岸から Ambilan のところまで賣られた衣料品・薬品・什器その他がこのようにして更にケン・エイ族のもとへ持込まれる。われわれがギンバで Ambilan 老人に進呈した赤いコーヒー・カップ6個のうち、4個までを、われわれのタオト・ダラム

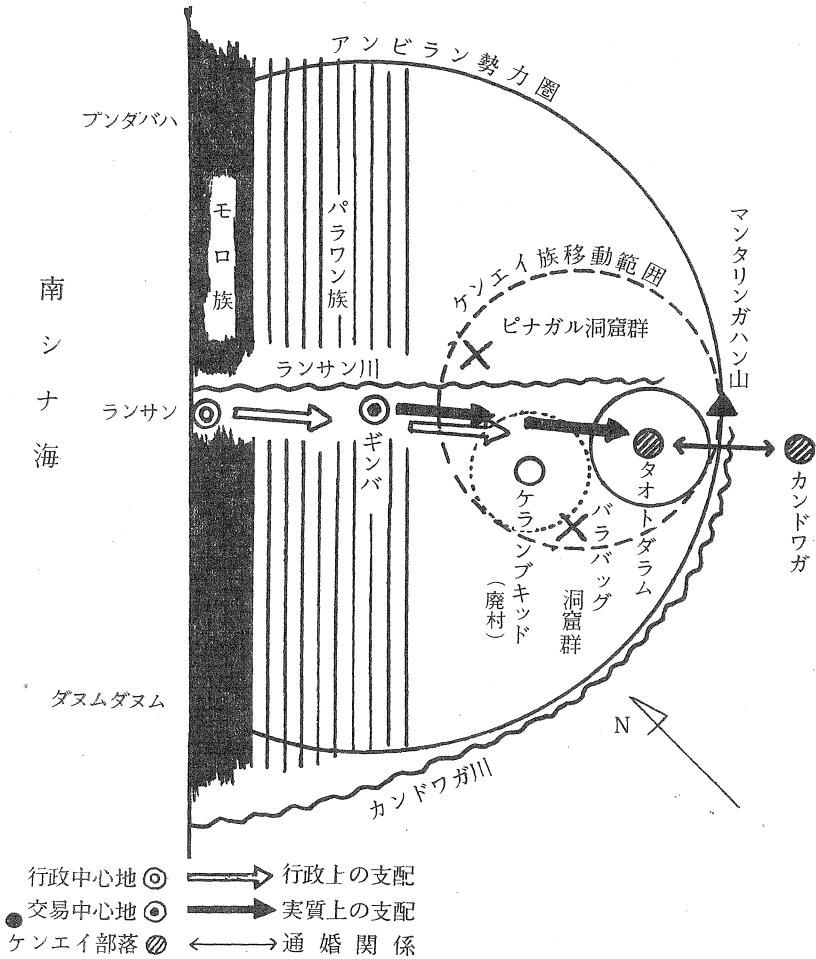
滞在期間中に部落民が得て帰ったのには驚いた。Ambilan の権限は極めて強力なものであり、海岸線の プンタ・バハ (Punta Baja) 岬、ダヌム・ダヌム (Danum-Danum) とマンタリンガハン山の三点を結ぶ円形の中が、その勢力圏であるといわれる(第5図)。

行政上の所管からいえばタオト・ダラムはケソン郡ランサン村に属し、そのランサン村長は Acero Oshita という日系モロである。Oshita はまた Ambilan の娘婿にも当たる。われわれは Oshita-Ambilan のラインを通じたお蔭でケン・エイ部落入りが可能となったのだが、現実には Oshita 村長とタオト・ダラムのケン・エイ族とはほとんど無縁である。その点 Ambilan は、いわゆる contactman として実質上のケン・エイ族支配者であり、また Ambilan の側近に政府任命の指導員 (concelor) が居てパラワン族およびケン・エイ族の指導に当たっていた。

タオト・ダラムのケン・エイ族の生活圏はこうにして概略を知ることができた。カンドワガ川を隔てた対岸カンドワガ部落の場合、行政上の所管はブルクス・ポイント郡、マリス (Males) 村に属するが、これとは別に、ここにも Ambilan のような位置の人物が介在するのではなからうか。そしてそれが誰であるにせよ、本来は1グループであるべきケン・エイ族集団が、カンドワガ川を境にしてタオト・ダラムは西の Ambilan に、カンドワガは東のある人物にと分割支配されているのではなからうか。またもしナラランガやウマヤにもケン・エイ族が居るとしたら、同様な形で、例えばエリアン川流域の実力者というものによって支配されているのではないと思われる。

そして最終的に、これらケン・エイ族の各グループを結びつける紐帯というものが存在するかどうかということになると、これまでのデータからは否定的な推測をせざるを得ないということになる。すなわち、タオト・ダラムのケン・エイ族の意識からは、カンドワガ以外の土地に同族が存在するとは認めて

いないようであった。その点も再度の調査で明らかにすべき点である。



第5図 ケン・エイ族の生活関係図

3 ケン・エイ社会の特性

短期間の調査では社会制度の全貌は把握し難い。特にタオト・ダラムにわれわれが滞在している期間には部落行事がなかったし、部落の誰かが裁定を下さねばならない事件も起こらなかった。しかしその中でもいくつかの特徴的な事実を見聞することはできた。

そのうちの一つに家族制度と結婚制度がある。

15才以下の男児と10才以下の女児の幼婚とも名づけるべき結婚は3組確認した。そのうちの最年少者は推定5才位の女児である。これらの幼婚においては、現実に同居生活をして男女の作業分担を荷ってはいるものの、肉体的には未成熟であって真の結婚生活を営むには至らない。しかし幼い妻は親もとを離れて夫の家に住んでいるのであり、逆に子供が4～5才以上になると一般の家族構成の中から除外されることと考え合わせると、この部族では核家族（夫婦および子供）さえ保持されず、むしろ非常に幼い時から夫婦という配偶者の関係でのみ生活が保証されるということらしい。

さらに特異なことは40才台の男と5才の女の結婚という例に見られるような、年齢の不均衡であり、これはその逆の20才台の男と40才台の女という組み合わせ2組と共に、相続と関連があると推定される。この前者すなわち40才台の男と、後二者、40才台の女とがいずれも再婚であり、さらにその中には実子があるにも拘らず財産のアルマンガは実子に譲らずに新しい配偶者と共有（名義は男のものであるが離婚すれば元の所有者のものになる）している事実、殊にその中の2組はアルマンガの保有数が部落の一、二位を争うという事実から相続婚と配偶者相続というような推定が生まれるのである。

同時に、未亡人や寡夫の場合にだけは実子（この場合でも5才以下と思われ

るが)と二人で住んでいたり、未亡人同士の姉妹が共同家屋の一室を持ち、さらには血縁関係の確認されない未亡人と不具女性の1組さえあった。敢えて想像を逞ましくすれば、非常の際の急速な移動・逃走に二人という単位がいちばん安全でかつ敏速な行動が取られるという考えに基くのではないかとも考えられる。もちろんこれは「他部族に姿を見られることを恐れ、逃げ廻っている」とされる従来の噂を前提にしての仮説であるが、家族数が常に二人という最少数であるケン・エイ族の生活単位には何かの意味があると思われる。

なお結婚に関しては、4等親すなわちいとこ同士の結婚が禁じられており、血族結婚の弊を緩和しようとする知恵が働いている。これもその前提として一夫姉妹婚の痕跡が探り出されるかも知れない。

社会制度の中で特徴的なことの第二は、部落に統卒者・指導者や宗教的特権を持つ者がいないことである。

例えば共同家屋の部屋割りとか焼畑の土地割りは、いずれも話し合いで決められるという。しかし部落会議(われわれの滞在中に1回開かれた)でも議長もなかったし、平素の行動からも命令系統・指示系統も探り出し得なかった。結局彼等はそれを悉くギンバの Ambilan に仰いでいる形で、現にその指示を受けるための伝令はいつもギンバとの間を往復していた。

50人たらずの人員の中に指導者がいないという例は皆無ではないがやはり異常であり、殊に他部族の首長に権限を委ねるというのは解釈し難い。経済的支配権を握られてこの形が生まれたと思われ、それ程古いことではないだろうが、いつごろからそうなったのかは明らかでない。

そして仮にナラランガやウマヤにもケン・エイ族が居るとしても、それらの地域に亘る同族の統一社会は構成されず、血縁関係の濃いカンドワガとさえ一体となっていないところに、漂泊性の強い移動生活であることといわゆる滅びゆく部族の末期に近い社会であることが想像される。

共同家屋 (Dakula-Banua) というのも特徴の一つであろう。われわれは調査時の共同家屋のほかにその一代前の共同家屋についても間取りと居住者名を確認したが、調査時現在のものは $10 \times 12\text{m}$ で中央の広間のまわりに 14 室、一代前のものは $7 \times 8.5\text{m}$ で広間はなく（或いは最初あったのをあとで 1 室増設したため広間がなくなったのか？）10 室が認められる。居住者数は現在のもので 29～31 人、一代前のもので 20～25 人（結婚をしていない子供はある部屋の居住者とは認められないが広間や廊下に位置を与えられている）である。一代前のものについては聴取りの相手が子供であって記憶の信憑性が問題になるのでそのまま比較はできないが、構成員の変動は著しく、前の共同家屋に部屋を持っていた者で今度は共同家屋から出てしまった者もある。或いはその家族から死者を出したというような不吉なことで忌を表わす退去となったものかも知れず、共同家屋の移転・改築そのものがこのような契機によると考えることもできよう。データが正確になれば構成員を比較することが何らかの問題を解く鍵になるかとも思われる。

部落民のうち共同家屋に部屋を与えられない者がかなりあるが、共同家屋の部屋の有無に拘らず、それぞれの焼畑には焼畑小屋を持っているから居住に差支えはない。むしろ、共同家屋に一室を持っておりながらそれと極めて近い場所にもう一つの焼畑小屋を持っていたり、共同家屋の内の自分の部屋から吊梯子づたいに行くことのできる樹上家屋を持っていたりする例の説明がつかない。

このケン・エイ族に関しては従来全く調査が不可能とされていた。われわれは短期間とはいえ幸いこの部族と生活を共にすることができたので、その調査報告は社会人類学界へ貴重な資料を提供することとなった。分析が不充分であり、いま「結語」ということを書くこともできないが、二、三の問題点を提起して大方の御批判を仰ぐ次第である。

- 註 1) Conklin, H. C.: Preliminary Report on Field Work on the Islands of Mindoro and Palawan, Philippines. (American Anthropologist, 51-2), 1949, p 272.
- 2) たとえば太平洋協会編：フィリッピン naturally 民族, 1942, p 242
- 3) 棚瀬襄爾：比律賓の民族, 1942, p 199 には「タグバヌア族のイスラム化されたものをパラワン族という」とある。
- 4) Orlido, B. C.: Map of Palawan, showing the Location of Palawan Cultural Minorities, prepared for Prof. George Ohshima, Kwansei-Gakuin University, 1967.
- 5) Ellinger, T. U.: Exploration in the Interior of Southwest Palawan, (Friend of the Brave, 1954), p 51.
- 6) 〃 : An Appeal for Peace in the Muslim Provinces, (Friend of the Brave, 1954), p 129
- 7) クローバー著, 三品彰英・横田健一訳：フィリッピン民族誌, 1943, p 103
- 8) The C. N. I. Monthly Bulletin: Palawan's Lost Tribe?
- 9) Fox, R. B.: The Pinatubo Negritos, Their useful Plants and Material Cultural. (The Philippine Journal of Science, 81-3, 4), 1952, p 391
- 10) The Manila Times, March 18, 1964: Cliffside Civilization, A Visit to Palawan's Lost Tribe.
- 11) The Manila Times, May 20, 1963: Ken-eyes, Palawan's "Lost Tribe" really "forgotten and neglected".
- 12) Ambilan, Panglima (Chieftain of Palawanes, Gimba) 談。

——関西学院大学文学部助教授——

追 記

第2次パラワン島學術探検隊のパラワン入りに先立って1968年7月、マニラで Fox 博士と再三語り合う機を得た。彼は「ケン・エイ族というのはパラワン族の一部であってこれを別に扱おうことには同意できない」という論点に立ちながら、私共の第2次隊が、ケン・エイとパラワン族の違いを明らかにすることに非常な期待を寄せている。なお彼自身は1965年ケラン・ブキット（本文、註10の場所）で10家族の共同家屋を見たというデータを提供してくれた。

1968年12月 マニラにて